

木下杢太郎日記

第四卷

木下李太郎日記 第四卷

第四回配本（全五卷）

一九八〇年五月三十日 発行

定価三〇〇〇円

著 者 太 田 正 雄

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋一丁目五
番地
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・二六五・四二一
振替 東京六三三〇

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田正子 1980

日

記

四

昭和十一年—昭和十六年

昭和十一年

一月十六日 木

細かき雪少しづつふり積り、夜には一尺ばかりとなつた。気温はさう低くは無い。病院では、アメリカ、セント・ルイスの「Toomey」といふ皮膚科醫者が調べ上げた秋蝨症の文獻を搜し得、それや、ブルムプトや Toldt、川村麟也氏などを原として今日は「秋蝨症」の一章を作り、甚だ抄取つた。金原から「母斑及び皮膚腫瘍」の本を早く作れといふ催促だが、千本の手が有はしまいし、さういふわけには行かぬ。六時病院を去り、原の町ゆきのバスで家にかへつた。マダムも女の子三、入臥床で、他人の家のやうである。然し昭子と和子が予の隣室に臥してゐるから少し *aimée* である。遠慮、謙遜から卑屈になり、回避と憎惡とを心に抱くわうい方向の日本教育の一例なるマダムよ。

食後「古事記序文講義」(山田氏)、「諸子概説」(武内)各十數頁づつよむ。そのあと林ご二つ食つて、Leo von König の Meier-Graefe: (Die neue Rundschau, August 1935) を三頁譯した。良くない文章である。然し、我々はマイヤ・グレエフェには負ふ所が多い。今更その行狀や所業を自ら研究する隙もないから、この謝意をケエニツヒの文章の翻譯で少しばかり表はすことにした。中央美術にのせるつもりだ。

今年になつて始めて、今夜ひとりごとのやうな日記をつくつた。

否この日記を思ひついたのは他の目的があつたのである。それは三つの詩の企圖が心に浮んだからだ。一つはずつと前に（數年前）に見た夢の記述だ。四方から狭く家がたてこめた入江に、軒の直ぐそばに千石船がつく。古東京らしい都會。また鯉のかつてあるはなれ座敷。畫題はあり、氣分があつた。然も何か求めるものがないやうな心があつた。最後にその家の主婦があいさつに出た。その時は、これが求めてゐたものだと思つた。然しそれは他家の人であつた――

二、友人が茶を立てて振舞つてゐる最中座敷へ蛾が入つてきた。客の一人の動物學者はその新しい種らしいのに氣をとられて、お茶をだめにした話。茶釜に夕日が光る――

三、與謝野寛氏追悼の詩。

一月十七日 金

外は雪であつた

夜六時から十一時過まで、外に人は阿部、小宮、原があつた。然し予は人にはかまはず、唯飲酒して酔つた。ちつとも愉快ではないが、何か心の鬱結がややはれたやうには思つた。然し家にかへり、また曉に目ざめて見ると好い氣持はしなかつた。

飲酒は悪か少くともそれに近い事である。さうして道徳的監視の有る所で敢て之をするからこそ何かの刺戟にはなるのだ。それを飲み酔ふことがあたり前のやうになつてゐる世界で飲酒したとて、それは何でもないことだ。

一月十八日 土

雪がはれ、朝から青空と日光。Toomeyといふセント・ルイスの皮膚學者の獸類の疥癬蟲の論文を
看つけ出して、今日は一日につひ、それにばかり係つてしまつた。

夜七時歸宅。手紙三本かく（生田まり、悔狀、山内習、淺野ふみ禮狀。）

夜々、予は考へわすらふ。この一月ばかりの精神と肉體との空虚が、思想の針をもあちこちと廻ら
せた。日中は自家批評なしに、病院での仕事（舊臘以來は主として「動物寄生による皮膚病」の原
稿を作ることであつた）でいそしむ。時に新しい小道が開けて一定の快樂は有つた。然し研究の方
は昨年秋あたりからかなり懈怠した。少しはしたところで、それは光彩も無い routine works に過
ぎなかつた。モノグラフィイを作るのは樂だが、第一義の仕事では有り得ない。

研究は——海水浴場の櫓の間で游泳するやうなのではなく、もつと沖へ遊び出ること——力量も
いり、勇氣もいる。そして避けるとはなく避けかけてゐたらしい。事によると——もう斷念したの
では無いか？

然し僕一人ばかりではないと自家辯護の聲がする。アツチでもコツチでもルチン・ウオオクの輩ば
かりだ。

だが、自分一人でも沖へ遊び出さなくては生命の意義がないぢや無いか。若し出来なかつたら、早
くこの道を思ひ切つて、他の道へ出るが可い。

——夜は König のマイヤ・グレフェエの追悼文の、默示録的のわかり悪い所へさしかゝつた爲め、それがかういふ事を考へる機縁になつた。そして、數句の間、目の前に立ちふさがてゐた高い壁のやうなものに、何か隙間を見出したやうな氣になつた。

「樂に流されてゐないで、自ら進んで突破しろ」といふ力弱い命令の聲だ。その良心の上に立つ自己主義なら認容して差支が無い。一時の焦燥からの憤怒であつてはいけぬ。

忽然としてアナトオル・フランスの評傳の結論が腦裏に沈澱した。

その春の海のやうな一生と見識、そのまだらな色の草木、その美しいユウムウルと甘美な皮肉——わたくしが健康で、やや閑暇で、心に餘裕の有るときこの上もないマンナの如くになる。

然しわたくしの心が沮喪したとき、心がゆるんだ時、それが何等の方向を與へぬ。支那の諸子から受けるやうな（たとひそれに就くを好ないとしても）ある道德的な、意志的な、いやでも應でも前途の障礙に逆つてゆくといふやうな氣をおこさせぬ。

〔欄外〕 *「マートン・サーやんが来たんだ。」*

一月十九日 日

二月一日 土

神戸奥村敬太郎氏夫人の訃音來る。五圓香華料と共に弔詞出す。

二月二日 日

在宅。岩波より來り居れる「藝林閒歩」の校正刷約三十ボオゲンを校正す。

二月四日 火

入院齋藤氏(Progressive Paralyse. Malaria-therapie—9×發作)容態惡し。輸血など行ふ。

二月五日 水

夜八時河野君が岩波の小林氏をともなつて來た。森林太郎創作全集の出版に關する用事であつた

二月六日 木

前に住んだ光禪寺の家は古い茅葺屋舎の小屋に繼ぎ足し繼ぎ足して、のちに瓦の屋根に直した古る家で、地震の時はあぶなからうと思はれるほどのものであつたが、それでもまはりに庭があつて二百年の檜が二本、それからいろ／＼の木が無秩序に植わり、あれちのぎくさへその興趣を助けて四季のうつりかはりに心を喜ばした。今度の家はそれより無論遙に立派だが、俗人の氣分が澎湃してゐて、庭はひどく刈りこんだ梅と松とつつぢ、ある型はあるが、自然らしいもの、豫期しないものがある。去年の二月以來、僕は一度も庭に下りたことはなし、又庭を見たこともめつたにない。ここにうつるとその人も、俗人のやうに見える。僕は家庭にも興味を失つた。

何でもいいから澤山仕事しようと思ひ、朝は八時半から六時半まで病院に居る。近頃は主として文獻上の涉獵である。それでも何もしいよりましである。

今日は皮膚出血といふたのまれの仕事を完成して、ホルモンに關係のある皮膚病のことに移つ

た。

夜縣衛生課長北條氏より電話にて安田恒藏氏の計を知る。

二月七日 金

午后二時故安田氏の葬儀に列す。性病豫防會の役員たりし故なり。歸來石津寛君の訃音を見る。

二月八日 土

弘前ウルハン氏に發信。

Keratoderma 文獻しらべ。午后教授會。ひろせの論文受入になる。

夜足立喜六氏の考證法顯傳讀み始む。舊臘フウシエエの健駄羅美術の一部を抄譯し、之と大に關係有るなり。

石津嗣子に五圓の香華料と共に弔詞を出す。又綠川浩に發信。

二月九日 日曜日 晴

朝より病院にゆきて Keratoderma tyloses palmaris progressiva 及び Acanthosis nigricans の文獻を調べる。廣田及び橋本の「治療及處方」に寄せたる内分泌機能障礙性皮膚病の稿はかなり杜撰のものであつた。

夕六時歸宅、七時半ごろ佐藤三郎、野村一を伴ひ來る。野村は三月末より弘前病院をやめて二年餘りまた研究室生活に入りたしといふなり。かへるとき色紙二枚贈る。村柿の禮なり。

貳月十日 月 晴

朝電話かゝり來り、それから北川湊君來訪。十一時半まで居る。四月ごろ出張渡歐せんといふなり。二三月獨乙に居り主としてリヒテンベルヒの教室に學ぶつもりなりといふ。高須のヘエフエの論文のこと頼みてゆく。

講義、サルワルサン。午后四時半より於珠に四五人あつまり文酒の會を爲す。原、勝本、武内。予もせいろつびき半折四五枚試みたれども今宵は出來わろし。一時に達す。兒島君は今夜深く歸來の由にて會せず。

〔欄外〕 富本憲吉の山茶花圖

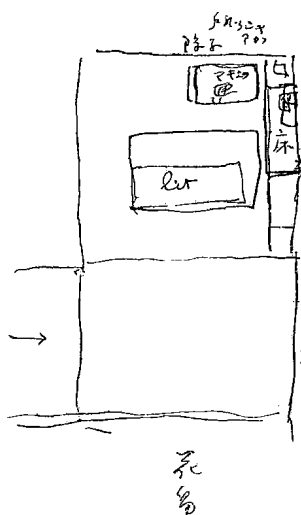
二月十一日 晴

この數日來氣候急に溫くなれり。九時半式あり。そのあと長谷部言人、佐藤丑次郎兩氏の講演あり。前者は日本人の地方的の差異、後者は日本憲法の本源を説きたり。それより病院にゆき六時までアカントジス文獻しらべ。夜雪後の芭蕉の詩案を得、試みず。

二月十六日 日 晴

七時に停車場に迎へに行つてくれたといひ、宿に入ると半時間もたゝぬうちに小林勇君が森類君と一緒に來た。二階のサロンで珈琲をのんだ。

九時半か十時ごろ千駄木の森邸に行つた。もと「花ばたけ」のそばに小門が出來て「森類」の名札がかかつてゐた。



そこを入ると、道側の低い垣にはあけびが一ぱいにかかつてゐた。そのすきから、武石弘三郎君の作つた森博士の大理石胸像がむかう向きに立つてゐた。それは小さいアトリエの角になつて、窮屈さうに見えた。

マリさんが迎へた。小林は他室で待つた。未亡人の部屋に通された。あほぬけに休んでゐられた。そこは二間つづきで、元の花畠に面

した一小室には二三のこしかけが置いてあり、杏奴さんのつくつたせともの丸額、以太利亞風景（水盤）の小幅、満洲でうつされたメエトルの寫眞（アゴひげあり）がかかつてゐた。

未亡人は向つて左の方を頭にして休んで居られた。足許の方が床の間になる。そこに包んだ琴が立ててあつた。その傍に金色にぬつた木のわくに入れた鍾馗さんの畫が立ててあつた。これは予が明治四十五年か四十四年か、本郷富阪の宿で、晝やすみに、金巾の上にかいたものだ。今見てもさうわるくはなかつた。その時履が大きいと思つたがそれほどでもなかつた。

「半日」は全集へ決して入れないといふ證書に予も保證人に立つた。

マンデユウ。ふかし直したときかかれた。マリさんは、いつもは次の日にたべる故ふかすが今日は新しいからふかさないと答へた。

予はサトウを入れず、紅茶をのんだ。

マリさんは觀潮樓歌會の時、下の座敷まで笑ひ聲がきこえて賑かだつたといった。

未亡人に灰色の毛髪は極めて稀であつた。五十五六になられると思はれるが、我々の年の歩みと平
行にゆく故に、やはり昔見え時^{つご}だけの年上にしか見えなかつた。

マリさんが蒔繪の引出しから、百穂君の素描を大きく複寫したものを出して來た。多分スバルのう
らへの原畫の一部を廓大したものと思ふが、その原畫はどこにあるのであるか。

醫者がたべものを極めて制限するといつた。

それから——あまり長く話をしてはいけなさうだから——類さんのアトリエに行つた。四郎氏、杏
奴氏、マリさん、小林、予、椅子にこしかけて一時間ばかり話をした。

二月十七日 月 午前やや曇り、午后晴。

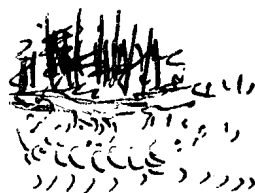
一時半の汽車にのつた時、アメリカに長くゐたやうな風采の夫婦。殊にマルクワルト嬢の如き躰格
の大女絶えず話をしてゐた。そして横臥するしかたが日本の女めかずに異人めいてゐた。

花野富藏氏譯の「日本夜話」をよむ。中に犬の生れかはりのロシヤ人の事あり、興をひく。

aimer et admirer 一つの低い執拗な、然し弱い聲がさういふやうである。

もう時だ、やめろ、そして諦める。

いつかの水を空に散らしたやうな images は残念ながら今回はなかつた。そして茶爐にとまつた蛾
のそれも。



仙臺につくにつけて remords は薄れる。少しは何かに反抗する心が起る。然し calme ではあつた。

二月十八日 火

夜七時まで病院で仕事する。「白内障を伴ふ鞆皮様皮膚症状」といふものの文獻的調査であつた。それで眼科の小柳君をも訪ねた。汗腺癌は新しい標本でも同じやうな組織像を示してゐた。

八時頃河野君が杉君といふわかい佛文學者をつれて來て十一時頃まで話す。Lesage の Gil Blas のこと、Rabelais が Docteur en médecine なること。ou 及び eu の發音のこと。Anatole France en pan-touffes をかいた Jean-Jacques Brousson がいやすかない奴で、それを出版する爲めにいはゞフランスの死を待つてゐたやうなものだつたこと。まづそんなことだつた。杉外に入院中の吉崎修一といふ人の容態をきくことを頼まれる。

二月十九日 水 晴

今日は午后割合に早く、存外に長くかかった「内分泌腺障碍と關係を有する皮膚疾患」の原稿を書き了つて、日新治療に送つた。これで他より押しつぶせられた仕事は一先打ちきることにする。總廻診變つたことはない。二人の噴火孔狀瘡は何とも手のつけやうはない。丹毒は下熱。歸來仕事出來ず十時にはやすむ。

二月廿日 木 晴

一月の半以來うち捨てておいた「寄生蟲性皮膚疾患」のモノグラフィイ始める。今日は仕事の變りであり進行しなかつた。夜ノエル・リテレル二部來り、よむ。文藝汎論。André Jouhn のメラクロワ研究。

夜風が甚だ寒い。

二月廿一日 夜

Ennuï..... Philosophie des Unbewußtseins をかりてきて13頁讀んだ……その當時／そしてわかかつたら面白かつたらう。

よむのもつまらなくなつた。Meier-Graefeのことをかかうかと思つたが、それもいやだつた。煖爐に薪をどつさり入れてうたゝねをしようとしたが、假睡する氣にもならなかつた。日本字の小説なんぞ一寸よんでみてもつまらぬ。

どうしたらいいか分らない。

Allein und Geschlossen だ。外に世界はあるやうだ。然しそれは唯接觸する時だけの世界だ。自分の裡に歸着すると全くの別物だ。

家も自分一個以外は外物だ。

青年は amaeba の如く Pseudopodes を派出する。そして心が外延的になる。世の中を orchestre だと感ずる。

充分今日は勉強した。もう勉強の餘力が残つてゐない。

外に求めた。そして無かつた。少なくとも有るとするには非常の努力を要する。内に求めると——それは空虚に似てゐる！——

三月三日 火

今日は起き出して病院に出た。廣瀬の審査要旨を作つた。

三月四日 水

三月五日 木

午后三時から科長會議。赤字問題なり。

三月六日 金

腰痛殊に甚しい。午后四時から集談會があつたが、五時から山ノ内氏の結婚披露に招かれてゐるから出られなかつた。五時青葉。餘興などあり。山川氏。八時半まで。